

健康的美的服装同盟（1890-1894）の試み

— その影響と成果 —

菅野 ももこ

A try to The Healthy and Artistic Dress Union (1890-1894)

— There influence and result —

Momoko KANNO

はじめに

1880年代のイギリスでは、女性ファッションの変革への意識が顕在化しはじめたその当初、医師やフェミニストらは、コルセットによってウェストを細く締め付け、レースやリボンで飾り立てた当時の一般的な装いに対して、健康面、衛生面を考慮した装いを提案していた。彼らが提案した装いは、女性の健康を害するタイト・レイシングを否定し、かさばった衣服の重さから身体を解放するものであった。こうした立場から1881年に設立された「合理服協会」(The Rational Dress Society, 1881-1890)は、通常のドレスの下にズボン式の衣服を履く装いを提案したが、それは「美しさに欠ける」と指摘され、女性ファッションに変革をもたらす事は出来なかった。

このような状況の中、1890年に設立された「健康的美的服装同盟」(The Healthy and Artistic Dress Union, 1890-?)は、非健康的、非衛生的、非生産的な特徴を持つ、19世紀後半のイギリスの女性ファッションに対して、美学的、芸術的な主義、思想を基に変革を試みていた組織である。彼らが掲げていた、装いにおける「美しさ」は、どのような性質をもっていたのだろうか。

本稿は、「健康的美的服装同盟」が当時を代表する画家やデザイナーらを中心に活動を進めていた事に注目し、彼らの女性服に対する試みと、同時代の美学運動及び芸術運動との関連性を明らかにする事を目的としている。

研究方法としては、「合理服協会」の機関誌『ガゼット』(*Gazette*, 1888-1889)、及び、「健康的美的服装同盟」の機関誌『アグライア』(*Aglaia*, 1893-1894)を用い、当時の女性ファッションの変革について考察をする。

1. 「エステティック・ドレス」と「合理服協会」

19世紀後半のイギリスにおける一般的な女性ファッションは、コルセットやバスルによって形成される人工的なシルエットと、頭からつま先まで衣服で完全に覆い隠す、身体の隠蔽を特徴とし



図1 バスル・スタイル 1879-1881



図2 ロセッティ画
空想 1880



図3 ゴドウィン画
エステティック・ドレス 1881

ていた。(図1) 細いウエストは非労働の象徴であり、更には女性自身と家族や夫の社会的地位の象徴¹⁾でもあったからであり、身体の隠蔽は人間の体に対し、品位に欠けるとしたヴィクトリア朝後期における身体意識の反映であった。²⁾

(1) 「エステティック・ドレス」(Aesthetic Dress)

人工的なスタイルの形成が女性ファッションの主流となっていた一方で、1840年頃から布のドレープ性を重視した古代ギリシャ、ないしは中世末の装いが一部の画家やデザイナーの間で取り入れられていた。こうした装いは1870年代になると唯美主義³⁾を支持する人々の間で「エステティック・ドレス」⁴⁾として受け入れられた。

例えばラファエル前派⁵⁾のメンバーであるロセッティ⁶⁾は、古代ギリシャをモチーフや主題とした作品を制作するに当たり、イメージに相応しいモデルの衣装を制作した。それらはコルセットを取り払った非常にゆったりとしたスタイルであった。(図2)

ラファエル前派によって取り入れられた古代ギリシャや中世末の装いは、やがてヴィクトリア朝後期の画家や、デザイナーの間で純粋に「美的なもの」として受け継がれ、そこでは、当時の世俗の関心に応えるような甘美な表現が用いられた。

他方、ゴドウィン⁷⁾やホリデー⁸⁾といった建築家やデザイナーは、古代ギリシャやローマ、中世末の歴史的なデザインを積極的に現実の衣服に採り入れ、当時の女性ファッションの変革を試みていた。こうして、絵画の中で描かれていた古代ギリシャや中世末の装いは、当時の女性ファッションに対する新たなスタイルの一つとして取り入れられていった。(図3)

唯美的な思想を持つ人々が倫理性や道徳性を説かず、純粋に美しいものを享受しようとした事で、古代ギリシャやローマ、中世末等の歴史的なデザインは、分かり易く、親しみやすいスタイルへと変化していった。この変化は、19世紀後半に生まれた美学が、20世紀のファッションの生成の過程に広く浸透していく事を容易にしたと言えよう。

（2）「合理服協会」（The Rational Dress Society, 1881—1890）

1881年の「合理服協会」の設立は、当時一般には殆ど無視されかけていた健康や衛生面に対して、人々の関心が高まっていた事の表れであったと言える。

その活動は、会長であるハーバートン夫人（Viscountess Haberton）らを中心に、19世紀のイギリスを代表する小説家であるワイルド⁹⁾やゴドウィンらによって積極的に進められ、「デヴァイデッド・スカート」¹⁰⁾の提案、機関誌『ガゼット』の発行による合理服やその思想の普及、展覧会の開催や参加、日本の装いの導入等、当時の女性ファッションに抗して、多様な試みがなされた。¹¹⁾



図4 デヴァイデッド・スカート 1883

提案された装いは、女性の健康を害するタイト・レイシングを否定し、かさばった衣服の重さから身体を解放するものであった。¹²⁾ (図4)

しかし、女性の脚がタブーとされていたヴィクトリア朝後期のイギリスにおいて、二本の脚の存在を露わにする「デヴァイデッド・スカート」は、当時衝撃的なスタイルであり、衛生的に優れていたとしても安易に受け入れられなかったと推測される。また、ズボン式の衣服を従来のドレスの下に重ね着するというスタイルは美的とは言えず、ワイルドは、「それ自身のズボン式を恥ずかしがっているということの悲劇的な証明だと思う。」¹³⁾と述べ、この装いを強く批判している。

2. 「健康的美的服装同盟」（The Healthy and Artistic Dress Union, 1890 — ?）

（1）「健康的美的服装同盟」の発足

「合理服協会」が活動を休止した同年の1890年7月2日、「健康的美的服装同盟」という新たな組織が設立された。「健康的美的服装同盟」は、ドレスを主とした健全なアイディアの普及を目的として設立された。¹⁴⁾ このグループは、画家のワッツ¹⁵⁾や建築家であり、王立美術委員会の準会長であったブルームフィールド、デザイナーのホリデー、イラストレーターのクレイン¹⁶⁾といった19世紀後半のイギリスを代表する芸術家やデザイナーを中心に活動が進められていた。

「健康的美的服装同盟」にはどのような人物がメンバーとして加入していたのだろうか。以下は機関誌の『アグラリア』第1号に掲載されている副会長メンバーの一覧である。

副会長

マリー・ヴォン・ヒュージェル夫人	Lady Mary von Hugel	ジョージ・フレデリック・ワッツ	G.F.Watts, Eso, R.A
ワッツ夫人	Mrs. Watts	ルイス・ジョップリン夫人	Mrs. Louise Jopling
スペンサー・ウェルズ医学博士	Sir Spencer Wells, M.D	マンカスター 夫人	Lady Muncaster
ハイモウ・ソーニークロフト	Hamo Thornycroft, Esq, R.A	ソーニークロフト夫人	Mrs. Thornycroft
		ウェントウォース夫人	Lady Wentworth ¹⁷⁾

それでは「健康的美的服装同盟」の「会長」を勤めていたのは誰だったのか。ニュートンが「健康的美的服装同盟」の設立時に関する記述の中で「同盟を支えるリーダーを必要としていた。」¹⁸⁾と記している事から1890年の同盟設立当初は会長がいなかったことが分かる。更に1893年から発行された『アグライア』には会長名を記入する欄が設けられているものの、1894年の最終号まで空白のままであった。これらの事から「健康的美的服装同盟」には芸術家やイラストレーター、医師といった様々な分野の専門家が参加していたものの、同盟の活動を取り仕切るリーダーが不在であったと推測される。

(2) 『アグライア』

『アグライア』は1893年から1894年まで、「健康的美的服装同盟」から発行された機関誌である。発行期間は短く、僅か3度だけの発行であった。ここでは『アグライア』がどのような刊行物であったのかを1)–5)に分けて述べる。

1) 発行期間

『アグライア』の発行期間は1893年2月から翌年の1894年の秋までである。この間に3度発行され、第1号は1893年2月、第2号は1894年の春、続く第3号は同年の秋である。第1号の表記が「2月」であるのに対して第2号からは「春」、「秋」となっている事から、当初予定していた月刊を第1号発行後に季刊に変更したと考えられる。最終号である第3号には、読者に向けた廃刊の理由等の説明が一切無く、廃刊の原因を明らかにする事は出来なかった。

機関誌の発行は、「健康的美的服装同盟」による衣服の変革を広く示す、教育普及を目的としていた。しかし、周囲の反応は厳しく「健康的美的服装同盟」は、『アグライア』の第2号について、「11月の新聞に“悪質な宣伝”の中で読まれる事になるだろう」とい考えていた。この事から、当時の保守的な人々にとって、同盟が示した女性ファッションの変革は受け入れ難いものであったと推測される。¹⁹⁾

2) 購読料金

購読料金に関しては、『アグライア』の委員の表記の次の欄に毎号明記されている。以下が料金システムである。

年間購読料について、年間に2度発行される雑誌1冊は、7月1日より前に4シリング支払った方は送料無料。メンバー以外の雑誌の料金は、1シリング。1刊;送料は1シリング2ペンス。郵便の注文はマーガレット・ガウインに支払うこと。住所はロンドン、リージェントストリート、136。²⁰⁾

3) 名称の由来

機関誌である『アグライア』の名称は何に由来するのだろうか。『アグライア』の第1号の序章の冒頭には「優美— 英国の言葉の中で最も魅力的な言葉—この雑誌が示している運動の考え方を特徴づけるのに適切な表現である:したがって、題名は“アグライア”である。²¹⁾」と記されている。

アグライア (Aglaia) とは「輝く女」という意味を持つギリシャ神話に登場する三美神のうちの

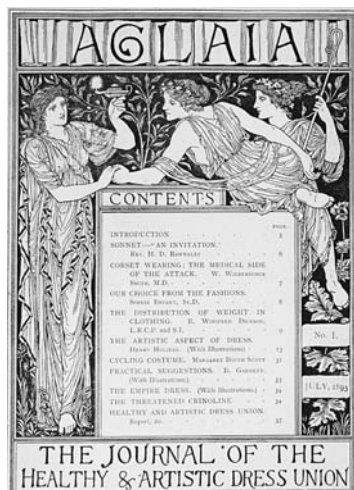


図5 ホリデー画
『アグライア』表紙 1883

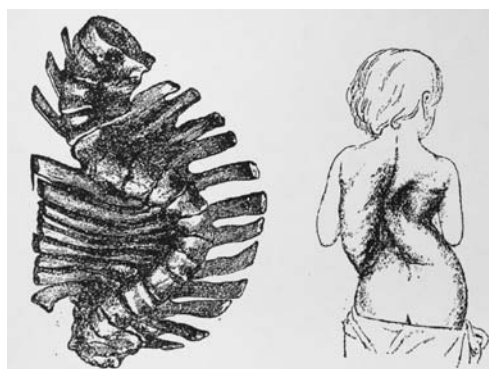


図6 変形した身体のイラスト 1884

一人である。他の二人の女神はタレイア (Thaleia) とエプロシュネ (Euphrosyne) である。タレイアは「若さ溢れる健康」の象徴であり、エプロシュネは「喜び」の象徴とされている。「健康的美的服装同盟」はアグライアただ一人を同盟のシンボルとしていたのではなく、タレイア、エプロシュネという「健康」と「喜び」の象徴である二人の女神も共に象徴とし、この二人の姉妹の存在によって輝きを放つアグライアという女神を「健康的美的服装同盟」の中心的なシンボルとして掲げていた。

4) タイトルページのデザイン

『アグライア』のタイトルページをデザインしていたのは、この機関誌の編集長を務めていたヘンリー・ホリデーである。ホリデーはバーン・ジョーンズ²²⁾ やエヴァレット・ミレイ²³⁾ といったラファエル前派のメンバーと交流のあった人物である。

タイトルページには「健康的美的服装同盟」がシンボルとして掲げていた古代ギリシャの三美神が描かれているが、この三人のどの女神がアグライアなのだろうか。答えは『アグライア』第1号の中のホリデーによる「ソネット」に記されている。詩の11行目にある「アグライア、彼女の手には灯りが燈された。」²⁴⁾ から、タイトルページの一番左側に立ち、左手にランプを持った女性がアグライアである事が分かる。(図5) そしてもう片方の手は、健康と喜びの女神であるタレイアとエプロシュネの姉妹と硬く結ばれているのである。ホリデーによるタイトルページのデザインには、「健康的美的服装同盟」が目指した、健康的な美しさが表現されている。

5) 役割

『アグライア』は「健康的美的服装同盟」のメンバーの主張を読者に示す役割を担っていた。『アグライア』の第1号の序章には、「『アグライア』はファッションブックでは無いと、私達は読者に警告しなければならない。そしてこれはファッションブックよりも理性的である。」²⁵⁾ と記されている。この組織は画家、建築家、イラストレーター、医師、フェミニスト、といった様々な分野の専門家によって構成されていた。そして、彼らはそれぞれの立場から当時の女性ファッションに対

して自身の主張を文章やイラスト、写真を用いて読者に示していた。「健康的美的服装同盟」は『アグライア』の読者に対して次のように述べている。「我々は説得力のある説明や、効果的な挿絵によってメンバーと読者に悪を拒否して彼ら自身に似合う良いものを選んでもらいたい。」²⁶⁾ここから、医師による専門的な解説、当時を代表する画家やイラストレーターによる挿絵が、読者に芸術的で健康的な装いを選択させる目的を持っていた事がわかる。

画家やイラストレーターによって描かれたイラストは、古代ギリシャ風のドレスや自然な身体の女性像ばかりではない。変形した脊椎や歪んだ姿勢の少女の姿も細部まで描かれている。(図6)自らの時代の装いがどのような状況であるのか『アグライア』は専門的な立場から検証し、その危険性を読者に対して警告すると共に、「健康的美的服装同盟」が示す衣服の必要性を訴えている。

(3) 「健康的美的服装同盟」の主張

1) 美しさについて

「健康的美的服装同盟」は、機関誌である『アグライア』を通じて当時の一般的な装いとは異なる「美しさ」を提案していた。その美しさはどのような特徴を持っていたのだろうか。『アグライア』の編集及びタイトルページを手がけたホリデーは、自身の記事『装いの芸術的な局面』²⁷⁾の中で、装いにおける美しさについて述べている。ホリデーが挙げる美しい装いのために必要な条件は、a)「健康と有用性」、b)「身体」、c)「調和」の3つに分類できる。

a) 健康と有用性

ホリデーが示す装いの美しさは、何によって形成されていたのか。ホリデーは自身の記事『装いの芸術的な局面』で美しさにとって必要な条件として「健康」と「有用性」を挙げている。

私は、我々の装における美しさ、健康、有用性についての奨励すべき目的を理解している。私はこれらの最初のもの（美しさ）には他の2つ（健康と有用性）が含まれているべきで、美しさは病気や不調和とは共存できない事を示せると思っている。²⁸⁾（ ）は筆者による。

ホリデーはここで非健康的で、必要性の無い過剰な装飾が施された当時の女性ファッションを「美的では無い」と主張し、自らが提案する美しさとは「健康」と「有用性」を内包したものであると述べている。

b) 身体

ホリデーは装いの基本は人間の身体であり、その形が美しくなければ、その装いはすでに失敗であると主張している。²⁹⁾ a) で美しい装いに必要な条件として健康を挙げているように、健康的な身体こそ美しい装いの重要な基礎であるとホリデーは考えていた。

c) 調和

ホリデーにとっての美しい装いは a) の健康と有用性、b) の身体の調和によって生み出されるものであった。

調和とは、美しさの本質である；病は組織の調和した働きの失敗を意味する。そしてこの調和を破壊する傾向があるものは全て美の核心を攻撃してくる。同様に、何の役にも立たないものは、その構造が意味するものと調和していないからである。そしてこの不調和は美しさにとって致命的である不調和の感覚を引き起こさせる。³⁰⁾

ホリデーはここで、病や有用性に欠けた当時の一般的な装いの問題点について、調和が保たれていないために引き起こされていると指摘している。

2) 古代ギリシャ及び中世風ドレスの推奨

ホリデーならびに、「健康的美的服装同盟」のメンバーは、2-(3)-1) で挙げた「美しさ」の規範を古代ギリシャ及び中世末に見出し、双方の装いを推奨していた。³¹⁾ この古代ギリシャと中世末という二つの異なる時代の装いは全く別のスタイルではなく、いずれも身体に布が沿っているという共通点がある。事実、11世紀末頃から始まった十字軍の遠征によって古代ギリシャの文化がヨーロッパ全土にもたらされ、中世末の装いには薄手の流れるようなドレープ等、古代ギリシャの特徴が見られる。

『アグラリア』には芸術家による古代ギリシャ及び中世風ドレスのイラストや写真が数多く掲載されており、「健康的美的服装同盟」がこの装いを当時の女性ファッションを変革させる最善策として、普及を試みていた。古代ギリシャの衣服は、19世紀後半の一般的な女性ファッションとは大きく異なるものであったが、当時を代表する芸術家によるイラストの数々は読者の関心を集めていたと考えられる。(図7)

図7は『アグラリア』第1号に掲載されているホリデーによって描かれた古代ギリシャ及び中世風ドレスのイラストである。左が古代ギリシャのトロイのヘレン、右が中世のイングランド王ヘンリー2世の寵妃のロザモンドである。いずれもコルセットを着用せず、人工的な身体の形成は一切見られない。そして布が身体に沿って自然に流れ、美しいドレープを描いている。『アグラリア』には「我々は過去においては一般的であったが長い間珍しくなっていた美しさを復活させ、健康的で自然な衣服をこの時代の健康を損なう衣服の代わりにする事を望みます。」³²⁾ と記されており、当時のコルセットによる人工的な装いに代わるものとして、健康と美しさを兼ね備えた古代ギリシャおよび中世末の装いを強く推奨している。

3) 芸術教育の普及

「健康的美的服装同盟」は当時の装いの変革を試みると共に、芸術教育の普及にも取り組んでいた。『アグラリア』の第3号にはウォルター・クレインによる「芸術教育の再考」と題した記事も掲載されている。「健康的美的服装同盟」が取り組んでいた芸術教育は日々の生活空間に「美」をもたらす事を目的としていた。なぜ「健康的美的服装同盟」は装いだけでなく、生活の場にも美しさを求めていたのか。それは「環境の粗悪さが人々の趣味を堕落させる」³³⁾と考えていたからである。「健



図7 ホリデー画 トロイのヘレンとロザモンド 1883

「健康的美的服装同盟」は『アグライア』を通じて、芸術教育への取り組みについて次のよう見解を示している。

「健康的美的服装同盟」は以前から高い品質を目指している。その仕事は簡単ではないが私達が従事してきた日々は報われると信じている。(中略) 教育の場は日々の生活に美しさを導入させることに努力している。芸術がフレームの中の写真のように思われていた時代は過ぎ去った。³⁴⁾

この様に、「健康的美的服装同盟」の新たな試みは、装いの変革だけに留まらず、装いを含めた生活空間全体に及んでいた。

4) 個人の趣味について

「健康的美的服装同盟」が直面していた問題の一つが個人の趣味についてである。『アグライア』には女性の装いの趣味について「恐ろしい」という表現を用いている箇所も見られる。画家のワッツは『アグライア』に掲載されている「女性の装い」という記事の中で「個人の趣味」について次のように述べている。

趣味は定義するのが難しい性質を持つようになった。なぜならば考え方や個人の感情のように問題の範囲が広がったからだ。そして遥か昔から独断的に主張されてきた支配的な原則以外に、女性の衣装について趣味を導くのは不可能である。³⁵⁾

ワッツが「定義するのが難しい」と述べているように、19世紀の女性ファッションは短期間に目まぐるしく変化していく、非常に移ろい易いものであった。ここで述べられている「遥か昔」とは、おそらく古代ギリシャであると推測され、ワッツが古代ギリシャの衣服の原則を19世紀後半のイギリスの女性ファッションに採り入れようと試みていた。

5) 急激な変化への注意

「健康的美的服装同盟」は『アグライア』の中で「装いにおけるあらゆる改革の問題について、それが本当に永続すべきことであるならば徐々に行われなければならない、可能な限り自然に成長しなければならない。」³⁶⁾と主張し、女性の装いを急激に変化させようとする事に対し警鐘を鳴らしている。そして同盟設立の前年に活動を休止した「合理服協会」について、「花の生産を急ぎすぎた事が大きな間違いであった」³⁷⁾と指摘している。この「花」とは当時の一般的な女性ファッションに対する「新たな試み」とであると推測される。

床を引きずる程長いドレスによって完璧に脚を隠蔽していた19世紀後半の人々にとって、二本の脚の存在が露わとなる「合理服協会」が提案したデヴァイデッド・スカートは当時の一般的な装いからかけ離れた急進的なものであった。「合理服協会」は、新しい試みの成果を急ぎすぎた結果、人々から拒絶され、中傷の的となった。「健康的美的服装同盟」は、この「合理服協会」の反省を踏まえ、衣服の改革について「徐々に」、「可能な限り自然」な形で普及を試みていたと考えられる。

まとめ

ファッションとは、理論や思想だけでは成立しえない現象である。そこには、非合理的で、非機能的であっても「美しさ」という美的な要素が求められる。

コルセットによる人工美の追求や、身体の隠蔽を特徴とした19世紀後半の女性ファッションに対して「合理服協会」が提案した装いは、女性の健康を重視した事により「美しさに欠ける」といった指摘を受けていた。

健康面、衛生面を考慮した装いが提案されていた一方で、1860年のトロイア遺跡の発掘をきっかけに再興した古代ギリシャ趣味の流行は、ラファエル前派に始まり、ヴィクトリア朝後期の絵画や唯美主義を経て、人々にとって親しみやすいスタイルへと変化していった。この美学的、芸術的な流れを受けた「健康的美的服装同盟」の主張は、以下のように分類できる。

- 1) 美しさとは「健康」と「有用性」から生じるものである
- 2) 衣服だけでなく、生活空間全体の改革が必要である
- 3) 急激な変化は避けなければならない

ワッツやホリデーを中心に組織された「健康的美的服装同盟」の主張には、19世紀後半のイギリスを代表する芸術家グループであるラファエル前派の美学の流れを受け、生成された唯美主義的な要素が見られる。彼らの思想は、当時イギリスで様々なスタイルの一つとして注目を集めていた古代ギリシャ及び中世末の装いの推奨に繋がり、そこには、女性ファッションの変革において、健康や衛生面以上に美学的、芸術的な要素を重視していた事が伺える。

そして、「健康的美的服装同盟」が主張した装いにおける「美しさ」とは、「健康」と「有用性」の調和によって生み出されるものであった。19世紀後半の一般的な装いと相反する、布そのもののドレープ性を重視し、「身体」を隠蔽するのではなく、装いの基本として捉え、健康的な身体の維持を奨励したこの同盟の試みは、20世紀を迎えたファッションの世界にも広く浸透していく事となったといえる。(図8)

19世紀後半のイギリスで芽生えた女性ファッションに対する新たな試みは、世紀末へと向かう中でベルギーやドイツ、オーストリアといったフランス以外のヨーロッパ諸国へ波及した。

今後は、イギリスで生成された美学的、芸術的な変革の試みが、ヨーロッパ諸国のデザイナーを経て如何にして20世紀ファッションに採り入れられていったのか、その経緯について考察を進めたい。

本稿は平成20年度本学家政学研究科修士論文での研究内容を基にし、新たな調査結果を加え、執筆したものである。

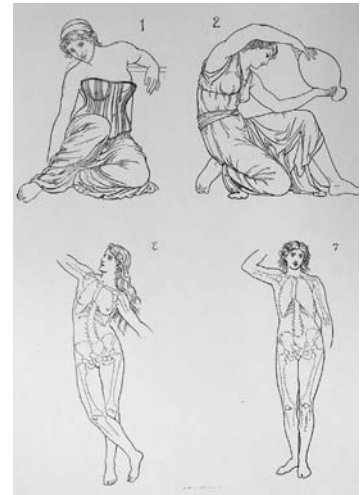


図8 健康的な身体 1894

謝 辞

本稿の執筆に当たり、温かい励ましと貴重なご助言を賜りました、本学教授の能澤慧子先生に、心から感謝申し上げます。

註

- 1) ソースティン・ヴェブレレン著・高哲夫 訳・有閑階級の理論・筑摩書, 1998, 188p.
- 2) スティーブン・カーン著・多迅鷹 / 喜多元子訳・肉体の文化史・リブラリア選書, 1989, 15p.
- 3) Aesthetic Movement. 「唯美主義」とは芸術は自足的、自立的、自己的である、という主張に基づく諸傾向である。19世紀後半のイギリスにおける唯美主義運動は非常に極端な傾向であり、その思想は絵画、建築、工芸等、多岐に及んだ。
- 4) Aesthetic Dress. 19世紀後半のイギリスに誕生した唯美主義を支持する人々の間に取り入れられた。切り込み装飾やパフスリーブ、ハイウエストの切り替え等の擬似歴史的な装い。コルセットを着用せず、身体を過剰に締め付けることの無いこの装いは、当時の一般的な装いに比べ、健康的であったといえる。
- 5) Pre-Raphaelite Brotherhood. 1848年に結成されたイギリスの若い画家、詩人、評論家グループの名称。当時のイギリス絵画の停滞を打破してイタリアの初期ルネサンス美術の誠実さ、素朴さを回復し、アカデミズムの源とみなされていたラファエロ時代以前に戻ろうという主張をこめている。
- 6) Rossetti, Dante Gabriel, 1828-1882. イギリスの画家、詩人。ラファエル前派の創立時からのメンバー。伝説や神話、聖書の挿話、ダンテの神曲や中世のロマンスなどを主題とした作品を描いた。
- 7) Godwin, E. W, 1833-1886. イギリスの建築家、設計者、デザイナー。唯美主義運動における中心人物とされ、日本趣味を取り入れた「アングロ・ジャパーニーズ」の家具をデザインした。また、舞台装置及び舞台衣装のデザインや、女性ファッションの変革にも積極的に取り組んだ。
- 8) Holiday, Henry, 1839-1927. イギリスの画家、ステンド・グラス・デザイナー。ミレーやバーン・ジョーンズと交流を持っていた。古代ギリシャや中世末を主題とした絵画作品を制作し、対象に忠実に描く事をモットーとしていた点において、ラファエル前派から影響を受けた人物といえる。
- 9) Wilde, Oscar, 1854-1900. イギリスの作家。ロンドンの社交界、文学サークルに交わり、機知に富んだ、派手な行動で知られ、芸術至上主義の指導的存在となる。作家としての活動だけでなく、女性の装いに対して積極的に意見し、妻のコンスタンティンと共に「合理服協会」のメンバーであった。
- 10) Divided skirts. 1881年に設立された「合理服協会」で提案されていたズボン式の衣服。通常のドレスの下に着用された。考案者であるハーバートン夫人やウィルソン博士の名が付けられた。女性の健康を考慮し、保温性に優れた衣服であったが、女性の二本の足の存在を露わにするこの装いは当時の保守的な人々には受け入れられなかった。またスカートの下に重ね着するスタイルに対して「美的ではない」といった指摘を受けていた。
- 11) Newton, Stella Mary. *Health art and reason*, London, 1970, 116p.
- 12) *The Rational Dress Society' s Gazette*, No.3, The Rational Dress Society, 1888, 1p.
- 13) オスカー・ワイルド著・西村孝次訳・オスカー・ワイルド全集・青土社, 第5巻, 1988, 35p.
- 14) Introduction, *Aglaia*, Healthy and artistic dress union, 1893, No.1, 1p.
- 15) Watts, George Frederic, 1817-1904. イギリスの画家。イタリアでヴェネツィア派の絵画を研究していた。ラファエル前派のメンバーと交流があり、古代ギリシャや中世を主題とした作品を手がけた。
- 16) Crane, Walter, 1845-1915. イギリスの画家、版画家、装飾家。モリスの理念に共鳴し、アーツ・アンド・クラフツ運動を推進した。壁紙、ステンド・グラス、刺繍等のデザインを手がけ、他方幼児向けの絵本の挿絵においても優れたデザイナーであった。
- 17) Introduction, *Aglaia*, Healthy and artistic dress union, 1893, No.1, 1p.

- 18) Newton, Stella Mary. *Health art and reason*, London, 1970, 140p.
- 19) Newton, Stella Mary. *Health art and reason*, London, 1970, 141p.
- 20) Introduction, *Aglaia*, Healthy and artistic dress union, 1893, No.1, 1p.
- 21) Introduction, *Aglaia*, Healthy and artistic dress union, 1893, No.1, 3p.
- 22) Burn-Jones, Edward Coley, 1833-1898. イギリスの画家。ロセッティの影響を受け、初期の作品は中世及び、神話を主題としたものが多い。後に15世紀イタリア絵画の影響を受けた作風へと変化した。デザイナーのウィリアム・モリスと交流が深く、モリス商会のためにデザインを提供している。
- 23) Millais, John Everett, 1829-1896. イギリスの画家。ラファエル前派の創立時からのメンバーであったが、1855年頃ラスキンとの不和により離脱。その後はアカデミックな画家として制作を続け、肖像画家としても優れた評価を得ていた。1896年にロイヤル・アカデミーの会長に就任するが間もなく歿。
- 24) Introduction, *Aglaia*, Healthy and artistic dress union, 1893, No.1, 6p.
- 25) Introduction, *Aglaia*, Healthy and artistic dress union, 1893, No.1, 5p.
- 26) Introduction, *Aglaia*, Healthy and artistic dress union, 1893, No.1, 5p.
- 27) Holiday, The artistic aspect of dress, *Aglaia*, Healthy and artistic dress union, 1893, No.1, 13p.
- 28) Holiday, The artistic aspect of dress, *Aglaia*, Healthy and artistic dress union, 1893, No.1, 5p.
- 29) Holiday, The artistic aspect of dress, *Aglaia*, Healthy and artistic dress union, 1893, No.1, 5p.
- 30) Holiday, The artistic aspect of dress, *Aglaia*, Healthy and artistic dress union, 1893, No.1, 13p.
- 31) Holiday, The artistic aspect of dress, *Aglaia*, Healthy and artistic dress union, 1893, No.1, 13p.
- 32) Introduction, *Aglaia*, Healthy and artistic dress union, 1893, No.1, 5p.
- 33) Introduction, *Aglaia*, Healthy and artistic dress union, 1893, No.1, 3p.
- 34) Introduction, *Aglaia*, Healthy and artistic dress union, 1893, No.1, 3p.
- 35) G.F.Watts, Women's Dress, *Aglaia*, Healthy and artistic dress union, 1884, No.2, 23p.
- 36) Introduction, *Aglaia*, Healthy and artistic dress union, 1893, No.1, 4p.
- 37) Introduction, *Aglaia*, Healthy and artistic dress union, 1893, No.1, 4p.

図版出典一覧

- 1) Dress, Victoria and Albert Museum (London, 1879-1881)
- 2) Rossetti, Dante Gabriel. The Day Dream, Victoria and Albert Museum (London, 1880)
- 3) Godwin, E.W. Aesthetic dress, *E.W.Godwin Aesthetic movement architect and designer*, Yale University Press (New Haven and London, 1999)
- 4) Dress with divided skirt, *The exhibition of the Rational Dress Association*. (London, 1883)
- 5) Holiday, Henry. Title page, *Aglaia* Healthy and artistic dress union No.1 (London, 1883)
- 6) Lateral curvature of spine, *Aglaia* Healthy and artistic dress union No.2 (London, 1884)
- 7) Holiday, Henry. Helen of Troy Fair Rosamond, *Aglaia* Healthy and artistic dress union No.1 (London, 1883)
- 8) The corset, *Aglaia* Healthy and artistic dress union No.2 (London, 1884)